

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

1. 日時：平成 29 年 3 月 18 日（土曜日）午後 1 時 30 分より午後 5 時 10 分
2. 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディアセミナー室 (306)
3. 内容
 - (1) 小山内優子 (AA 研研究機関研究員) 「中期朝鮮語のモダリティ形式 *-l ti-* のアクセント」
 - (2) 杉山豊 (京都産業大学) 「『杜詩諺解』初刊本に見出されるアクセントに関わる現象について一文献内に共存する変種への観察を通じて一」

中期朝鮮語のモダリティ形式 *-l ti-* のアクセント

小山内優子

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 研究機関研究員)

中期朝鮮語の形式名詞 *to* (こと) は、非現実連体形 *-l~lq* が先行し、コピュラ *-i-* がついた *-l ti-* (異形態に *-lq ti-*, *-l tti-*) という形で当為や非現実のモダリティを表す形式として用いられることがある。この形式については、諸先行研究において、その出自が「連体形+形式名詞」であることは認められてはいるものの、当為平叙文 (高永根 1997[2010]) や、当為の語尾 (志部昭平 1990) に文法化したものとして扱われている。

これまで、朝鮮語の形式名詞の研究では、何を以って形式名詞と認めるのか、換言すれば、当該の語・形式が形式名詞であるのか、助詞であるのか、接辞であるのかという問題が論じられてきた (高永根 1970, 1982 など)。しかし中期朝鮮語の形式名詞については、音韻論的観点の考察からの考察が十分になされておらず、形式名詞 *so* (こと) について若干の考察があるのみである (門脇誠一 1985, 金星奎 1994)。

本発表では、*-l ti-* をアクセント・イントネーションの観点から分析し、この形式が分析的なモダリティ形式であるか、一つの接辞として文法化したものであるかを考察した。具体的には、連体形部分 (*-l* 以前) と形式名詞部分 (*ti-* 以降) との間にアクセント境界があれば、分析的な形式であり、アクセント境界が無く、一つのアクセント句をなしていれば接辞化していると仮定し、当時どのようにこの形式が認識されているかを考察した。

用例の収集に用いた文献は次の通り:

❖ 15 世紀の文献

『釈譜詳節』(1447)、『月印釈譜』(1459)、『法華経諺解』(1463)、『三綱行実図諺解』(1481?)

❖ 16 世紀の文献

『翻譯老乞大』(1517)、『翻譯小学』(1518)、『小学諺解』(1558)

調査で得られた用例は、(1) の 4 つのタイプに分類した。

- (1) A 先行する連体形部分と *ti-* 以降との間にアクセント境界があるもの
- B 連体形部分と *ti-* 以降が一つのアクセント句をなすもの
- C A と B 両方の解釈が可能なもの
- D その他

15 世紀の文献に現れる *-l ti-* は、『法華経諺解』を除き、基本的に A あるいは C のタイプであった。(2) は A の例、(3) は B の例である。

(2) a. *a.lwolq ti.ni* LH#HH (釈詳 1361b8) b. *hwo.lq ti.ni* H#HH (月釈 08020b7)

(3) a. *kalq. ti.ni.la.* R#HLH/RHLH (月釈 17090a5)

b. *cwulq. ti.la.two.* R#HLH/RHLH (釈詳 0912a3)

ただし『法華経諺解』のみは連体形部分と *ti-* 以降が一つのアクセント句をなす例が 155 例中 35 例 (22.6%) 見られた (例 4)。特に *ti-* に条件・仮定を表す接続形語尾 *-ntayn* がついた場合に比較的顕著に見られる (例 5)。ただし、それぞれアクセント境界が認められる (もしくは) ミニマルペーアも存在している (4', 5')。

(4) a. *ma.lwol. tti.ni.* LHLH (法華 5014a2) b. *hwol. tti.la.* HLH (法華 5077a7)

(5) *hwol. ttin.tayn.* HLH (法華 4080b2)

(4') a. *ma.lwol. tti.ni.* LH#HH (法華 5201a7) b. *hwol. tti.la.* H#HH (法華 7182a9)

(5') *hwol. ttin.tayn.* H#HH (法華 5033a2)

16 世紀の文献は、規範的な規則では高調で現れるはずの語尾の最終音節が低調に転じていたり (例 6)、連体形語幹のアクセント自体が 15 世紀中葉のそれとは異なるもの (例 7) が見られるものの、基本的には、15 世紀の文献と同様に A もしくは C がほとんどである。

(6) *kal.mul. ti.ni.la* LH HLL (翻老 0244b4) (予測されるパターン: LH HLH)

(7) *hwol. ti.ni.la.* R HLH (翻小 0634a3) (予測されるパターン: H HLH)

以上の考察をまとめると、本発表の調査範囲において、モダリティ形式 *-l ti-* は『法華経諺解』を除いて連体形部分と形式名詞部分とがそれぞれ固有のアクセント核を有しており、アクセントの観点からは接辞化したとは見なしがたいことが明らかとなった。

参考文献

門脇誠一 (1985) 「中期朝鮮語の声調の特徴」『朝鮮学報』116: 1-17.

金星奎 (1994) 「中世国語 *uy* 声調 変化 *ey tayhan* 研究」[中世国語の声調変化についての研究] ソウル大学校大学院 博士論文.

高永根 (1970) 「現代国語 *uy* 準自立形式 *ey* 対 *han* 研究」『語学研究』6(1): 17-55.

高永根 (1982) 「中世語 *uy* 形式名詞 *ey tayhaye*」[中世語の形式名詞について]『語学研究』18(1): 83-100.

高永根 (1997[2010]) *Cey 3phan phywocwun cwungsey kwuke mwunpeplwon* [第三版 標準中世国語文法論]. Seoul: 集文堂.

志部昭平 (1990) 『諺解三綱行実図研究』東京: 汲古書院.

『杜詩諺解』初刊本に見出されるアクセントに関わる現象について
—文献内に共存する変種への観察を通じて—

杉山豊

(京都産業大学外国語学部)

本発表は、『分類杜工部詩』(以下、『杜詩諺解』)初刊本(全25巻、うち巻1、2、4不伝)の諺解文全体を対象に、その朝鮮語に見られるアクセント・イントネーション関連の現象について、「同一文献内に共存する言語的変種」という観点から検討を加えた結果を報告するものである。

本研究において、アクセント・イントネーション関連の現象として注目したのは、1)アクセントに付随した「律動音調(句音調)」、及び、2)(自立形式の文法化等により)特定の文法形式の内部における、構成要素固有のアクセント維持の有無の二点である。

まず、1)律動音調の観点から見ると、『杜詩諺解』初刊本は、a)2モーラ律動音調(及びそれに準ずるもの)のHH型がHL型に比べて圧倒的に優勢で、且つ4モーラ律動音調においてもHHLH型が優勢でHLLH型がほとんど見られないという、15世紀中葉的な特徴を色濃く示す巻3第59頁以前; b)2モーラのHL型が優勢となる点で15世紀末葉～16世紀的特徴を示すものの、その比率は他の部分(後述)に比べて相対的に高くなく、4モーラの律動音調においても、HLLH型がほとんど見られない巻5、6、7; c)2モーラのHL型が極めて高い比率で現れ、4モーラのHLLH型の出現も増加するという、最も後代的な特徴を示す巻3第59頁以後、及び巻8～25(うち、巻10～15において後代的特徴が最も顕著か?)と、大きく分けることができる。

次に、2)個別文法形式とアクセントとの関わりについて見てみる。

まず、‘-n(冠形詞形語尾)i-(繫辞)’、‘-l(冠形詞形語尾)i-(繫辞)’に由来するとされる先語末語尾‘-ni-’、‘-ri-’の結合した語形における、‘ni’、‘ri’の音節の直前でのアクセント的境界形成の有無に注目したところ、『杜詩諺解』全体においては、境界を形成しない傾向の強い中であって、ひとり巻3第59頁以前においては、境界を形成する場合が多数を占めた。このことを、巻3第59頁以前の言語の有する15世紀中葉的特徴とするならば、上述の律動音調における傾向とも符合するものである。

次に‘-a is-’の文法化に由来するとされる‘-ays-’、及び‘-as-’について扱った。まず、これら形式そのものの出現頻度に注目すると、巻5、6、7においては、‘-ays-’の出現頻度が両者の用例総数において90%以上を占めるのに対し、それ以降の巻においては、概ね‘-as-’の出現頻度がやや増加している。仮に‘-a is- > -ays- > -as-’という通時的变化を仮定するならば、このことは、これら巻5、6、7が律動音調において15世紀末葉～16世紀的特徴を、相対的により少なく示していたことと、同一の傾向と言い得るかも知れない。ところが巻3に目を向けると、律動音調が15世紀中葉的な特徴を示していた第59頁以前において、‘-as-’が少なくない頻度で現れる一方、律動音調が15世紀末葉～16世紀的な特徴を示していた第60頁以降においては、‘-ays-’のみが現れて‘-as-’が全く現れない。アクセント・イントネーション上の特徴の新旧と、‘-a is-’文法化の先後とが、いわば正反対の様相を示すという点で特異である。さて、これら‘-ays-’、‘-as-’の結合した語形のアクセントに注目すると、概ね、前者の結合した語形においては‘is-’の固有のアクセントが反映され、‘-as-’の結合した語形においては、そうではないという傾向が確認される。ただし、巻によっては、‘-ays-’、

‘-as-’いずれの結合する場合にも、‘is-’のアクセントが反映されやすい (巻 15 等) といった、巻ごとの異なった特徴も確認された。

最後に、‘-asye’、‘aysye’といった形式に見られる‘sye’における、‘isye (is- + -a)’のアクセント (LH) 反映の有無に注目し、検討を加えた。結果、概ね、巻 3 第 59 頁以前、及び巻 5、6 (、7) において、‘isye’のアクセントがより反映されやすいと見られることが示された。

※本研究は、JSPS 科研費 15K21488 の助成を受けたものです。